

サントウナ・ダイコンナ・ラディッシュ・コカブの作型と栽培法

(園試・南部分場)

1. 背景とゆらい

菜類は耐寒性が強く、パイプハウスの冬春期利用を回すうえで欠けたい品目である。またこの時期は地場および北海道などの市場からの需要も高く、継続的出荷を回すことが課題である。このため菜類の冬春とり作型と栽培法について検討した結果、一応の成果が得られたので指導上の参考に供する。

2. 技術の内容

1) は種期別生育日数と収量の関係は下表のとおりである。

は種期	生育日数と期待収量(kg)			
	ダイコンナ	サントウナ	ラディッシュ	コカブ
9月上旬	20~25 <sup>B</sup> (120~140)	25~30 <sup>A</sup> (140~170)	25~30 <sup>B</sup> (150~170 <sup>A</sup> )	40~60 <sup>B</sup> (400~500 <sup>A</sup> )
10月上旬	35~40 (120~140)	40~50 (130~170)	30~40 (120~200)	65~70 (300~500)
11月上旬	50~55 (120~150)	40~65 (180~200)	45~50 (200~250)	85~100 (300~400)
12月上旬	60~70 (140~170)	70~75 (150~250)	60~65 (150~230)	85~100 (150~250)
1月上旬	70~80 (150~190)	65~75 (160~200)	65~70 (200~220)	85 * (100~300)
2月上旬	55~60 (180~240)	60~65 (300~340)	50~55 (150~200)	70 * (100~150)

適応地域は沿岸部

\*コカブの1~2月まき作型の成立は困難

2) 栽植様式は下表のとおりとする。

品目	栽植様式		㎡当り株数	適応地域	備考
	条間	株間			
サントウナ	10 <sup>cm</sup>	10 <sup>cm</sup>	100	県下全域	は種期 11~3月
ラディッシュ	6	6	270~280	沿岸部	" 2~3月(多照期)
	10	6	160~170	沿岸部	" 11~1月(少照期)
コカブ	15	10	60~70	沿岸部	" 11~3月

但し㎡当り株数は床面積当り本数

3. 指導上の留意点

1) は種期別生育日数と収量

(1) ダイコンナ、サントウナ、ラディッシュ、コカブの品種はそれぞれ、美菜、東京ペカナ、ウクランボ、たかねとする。

(2) 間口5.4mハウスの場合の畦幅は180cm(ベットの幅120cm、通路60cm)とし、畦を基準とする。

(3) 保温方法はパイプハウス用トンネル被覆し、日中25℃前後で換気するが、夜間はシルバーポリトンなどの併用で保温を回す。特に厳寒期はビニール等の被覆資材を増し、2-3重トンネルにした場合の効果が大いなので、保温方法に留意する。(図1~4)

(4) 灌水は、は種時に十分行い発芽後は土壌の乾燥程度をみて適宜実施する。

(5) コカブの1~2月まきは根部の肥大期と気温上昇期が重なり肥大が早く裂根が多発するため、この作型の成立は困難である。

ラディッシュも乾燥後の灌水で裂根が発生しやすく、また日照不足(特に生育初期)で未成球にしたりするので、水分や光線管理にも十分留意する。

2) 栽植様式

- (1) サントウナ、小カブは、は種期に3種植密度の差はないが、日照に敏感なラディッシュは日照量の多い2-3月までは6×6cmの密植とし、11-1月までは10×6cmとする。
- (2) は種量は、ベツト面積1㎡当り、サントウナ2.5-3ml、ラディッシュ10ml(2-3月まで)7-8ml(11-1月まで)、コカブ1.5-2mlを目安とし、本葉発生時に1回目の間引、3葉頃迄所定の株間にする。

4. 参考文献 資料

昭和57,58,59年度岩手県試験南部分場試験成績報告書

5. 試験成績

1) 品目ごとのは種期別生育日数と収量および栽培様式については昭和57,58年度の結果を要約し技術内容の表を示す。

2) 保温方法と生育

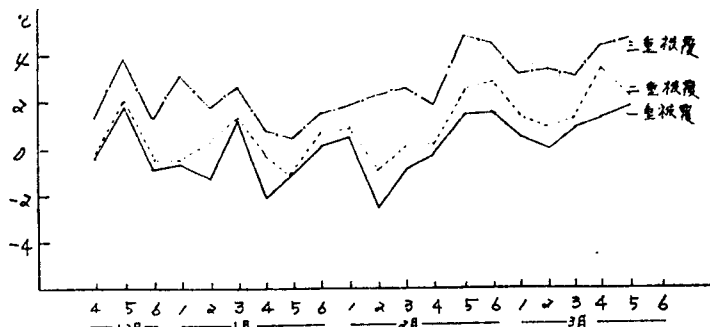


図-1 被覆方法の違いと半月別最低温度

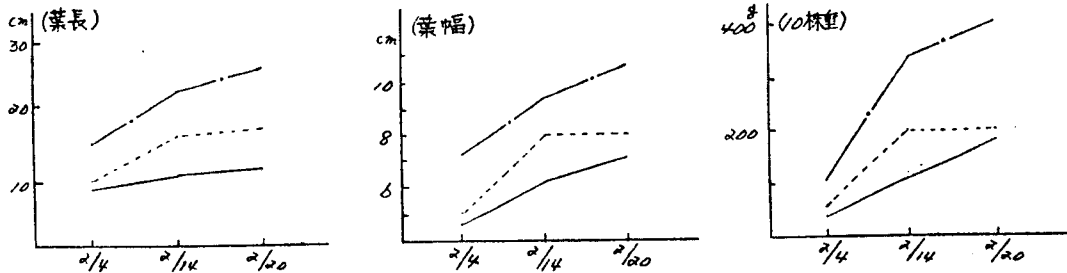


図-2 サントウナ

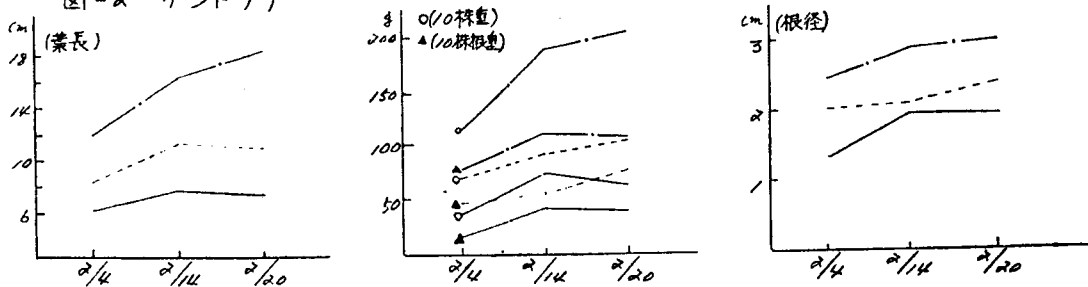


図-3 ラディッシュ

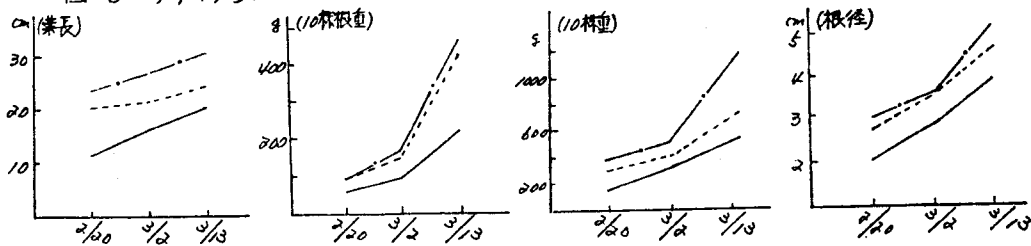


図-4 コカブ